

1. 日時：令和3年10月14日（木）15日（金）
2. 会場：とち帯広プラザ（北海道帯広市）
3. 募集定員：84名（一般：60名 福祉職従事者：16名 学生・新任者：8名）
4. 参加人数：87名（一般：34名 福祉職従事者：12名 新任者：7名）（講師：1名 関係者：33名）
5. 共催：開催委員会：（社福）慧誠会 （社福）帯広福祉協会（社福）真宗協会（医療法人社団）刀圭会（特非）十勝障害者サポートネット（特非）十勝障がい者支援センター 帯広市市民福祉部福祉支援室障害福祉課

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、当初、9月に予定していた高知と熊本での共生社会フォーラムの開催を延期せざるを得ませんでした。関係の皆様方のご協力ご支援により、ようやく10月から北海道でスタートすることができました。開催に尽力いただいた皆様に、改めて感謝申し上げます。今年度も各地域で開催委員会を組織していただき、“地域主体のフォーラム開催”と各地域における普及啓発の担い手となる”ファシリテーター（メンター）の養成・確保”を図ることを目指しています。

全体では、4月21日（水）に今年度の始動となる第1回ワーキンググループ（WG）会議を開催し、6月11日の滋賀県内WG会議、6月22日の第2回WG（WEB）会議を通じて、第1回実行委員会に向けた企画案等を検討しました。7月8日（木）に国主催の第1回実行委員会がWEB上で開催され、今年度の開催スケジュールと実施の基本方針が決定されました。

北海道／とち帯広では、すでに5月18日（火）に開催委員会準備会を開催するなど万全な準備体制のもと、綿密な検討を行っていただきました。開催前日の10月13日（水）に、昨年度の国実行委員会委員として尽力いただいた門屋充朗さん（NPO法人十勝障がい者総合相談支援センター理事長/所長）はじめ開催委員会の皆様のご協力により、速やかな前日準備が行われ、また、急きょメンターとして協力いただくこととなった青森の（社福）あーるどの熊谷さんを交えて、メンターと全体進行者により、プログラムの確認などの事前打ち合わせを行いました。



10/13 前日打ち合わせ・準備



初日の14日（木）朝8時45分に開催委員会の皆様とメンターの皆さんが集合。開催委員会委員長で地元協力法人の（社福）慧誠会 帯広生活支援センター所長の三上さんの挨拶を皮切りに、受付係や会場案内係などに分かれ、限られた時間内に素晴らしいチームワークで準備が進められました。

一般参加者は、開催地の帯広市および幕別町から、福祉施設・事業所の方々に加え、自治体、社会福祉協議会、親の会などの方々に参加いただきました。中堅研修には、帯広市にある福祉施設・サービス提供事業所および相談支援機関から12名の参加があり、新任者研修には、福祉現場職員7名の参加がありました。一般参加者・研修受講者・運営関係者 合計87名に参加していただきました。フォーラムの方針として“地域主体”を掲げていますが、コロナ禍による制約があるにもかかわらず、地元協力法人・機関のご尽力による事前の周知や準備を含めて帯広駅前というアクセスが最高の施設の使用など、様々な面で行き届いた配慮をいただきました。





フォーラムは、厚生労働省の鈴木企画課係長の挨拶で始まり、一般参加者と研修参加者とが共に参加するプログラムのオープニングとして、二つのグループによる表現活動が披露されました。まず、とち帯広で活躍し、音楽を通して療育活動をしている「音楽セラピー樹音（じゅね）」が登場しました。当日は、学校があるため幼児のみが出演し、最初は、大勢の参加者の前で緊張気味でしたが、体を動かすうちに徐々に緊張も和らいだようで、いきいきとした表情でトロンボーンやピアノの演奏に合わせたダンスや鈴の演奏など、客席の参加者と一体となったパフォーマンスが披露されました。続いて、障がいのある人たちが地域で生活するうえで大切な楽しみを持つことができる余暇活動を続けている「アフリカンサークル ハランベ」が登場しました。衣装も太鼓のリズムもアフリカンな皆さんの楽しいパフォーマンスにより、樹音に引き続き、会場全体があったかな雰囲気になりました。



続いて、北九州市を拠点とするホームレス支援の活動で著名な奥田知志さん（NPO 法人抱樸（ほうぼく） 理事長：第 19 回 糸賀一雄記念賞受賞）から基調講演がありました。テーマは「私達は何を大切にしてきたのか～いのちと意味～」です。奥田さんがホームレスの方を支援するなかで「おんなじいのち」を当事者から教えられ、糸賀氏の教えにある「同心円的な人間存在」と通じるところがあること、同心円の真ん中には「いのち」があり、コロナが「いのち優先」を教えてくれたこと、のお話がありました。外国では理解されない日本特有の「Hikikomori」や「Karoushi」に象徴されるように、いのちより学校や仕事大事、というゆがんだ風潮があったのが、コロナによって、私達が「いのちを優先する」という選択を迫られ気づいた、と指摘されました。また、重い障害のある子どもたちの価値の確認とは、「もはや単に能力の高低にかかわる価値の基準で照らしたものではない」「人間の生命そのものの尊重である」という糸賀氏の言葉が紹介されました。



「この子らはどんなに重い障害をもついてもだれととりかえることのできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間とうまれて、その人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である」

糸賀一雄(福祉の思想)117頁)

伴走型支援の効果⇔物語の創造

■西原さんが苦悶になった理由
 ■物(風土・環境)を物語に変える・・・物音の存在
 ↳ホームレスの食事「エサ」・・・洗剤「次油と一緒」
 ↳しかし改善してもらざる物・・・「お弁当」
 ↳食べ「物」でいうと増えるあまり変わらない
 ↳しかし、「物」に入りが変わることで「物」が「物語」となる
 ■社会関係とは何か？
 ↳「現金給付」「風物結核」が中心
 ↳自律支援・・・自分の活動創造のための条件整備
 ↳「個人が主体的に選択した存在として主体的にみずからの生き方を追求していくことを可能にするための条件整備」
 ↳「人間が生きて自律的個人へと向かって成長し、不完全ながらも自律性を保持しながら、自らの人生の物語を紡いでいくうえで条件整備のための制度」(菊池繁実著『社会福祉論考』「地域」で変える-」岩波新書)
 ■ある母子家庭のケース
 ↳「何を食べたかは覚えていないが誰と食べたかは忘れない」
 ※伴走型支援：物を物語に変える支援⇔自律支援

そして、やまゆり園事件の犯人が、世の中のために良いことをしたという確信の基準として、経済概念に偏重した「生産性」があり、糸賀氏が語った「自己実現が生産である」と対比されました。締めくくりに、受講者に向けて「生産性の圧力」の元に生きている同じ「時代の子」として、あなたは事件を起こした彼に何を語るのか？という宿題が出されました。



初日の午後には、NHK 厚生文化事業団の福祉ビデオライブラリーに昨年登録された NHK スペシャル・ラストメッセージ第6集「この子らを世の光に」(2007年3月放送)を上映しました。日本初の公的福祉施設である「近江学園」の設立に尽力した糸賀氏と糸賀氏を支えた池田太郎氏や田村一二氏らの紹介と、今日の入所施設や地域での生活支援の取り組みの紹介があり、障害のある子どもたちと寝食を共にし、不断の研究と実践に基づき編み出された思想や残された言葉が、時代背景が異なるものの、現代の福祉に通じる普遍的なものであることを学びました。

一般参加者と研修参加者がともに参加する共通プログラムが終了したのち、学生・新任者グループと中堅職員による語り部養成研修グループに分かれて、2日間のグループワーク研修が始まりました。



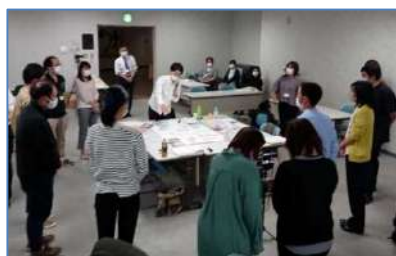
学生・新任者グループは、新任者7人が参加し、帯広生まれ帯広育ちの方から、「とにかく遠くに行きたい」と愛媛から引っ越してきた方など、バラエティに富んだメンバーでした。進行は、「バリバラ」でおなじみの玉木幸則さんと滋賀の救護施設で働く新採3年目の御代田さんが担当しました。初日の午後は、全体セッションの感想を共有し、「パフォーマンスの感動はリモートでは作れない」「入所施設の職員として、やまゆり園の事件は他人ごとではない」等、対話をしながら、それぞれが感じていた想いを言葉にしました。



語り部養成研修には、サービス管理責任者、相談支援専門員、就労支援ワーカー、保育士など12人が参加しました。密を避けるため受講者は1グループ4人と人数を限定しました。3テーブルに分かれ、各テーブルに1名ずつメンターを配置し

ました。WGにより開発した研修プログラムに基づき、とんがるちから研究所の近藤さんと竹岡さんがワークシートとスライドを用いて進行しました。メンターは、開催ブロックから北海道の(社福) ゆうゆうの小西さんが経験者として参加され、青森県の(社福)あーどどの熊谷さんが初参加されました。3人目の滋賀県(社福)グローの斎藤さんは、北海道旭川市の出身で、全員が開催ブロックゆかりの布陣となりました。また、実行委員会委員で座長代理の久保さんとWGリーダーの田中さん(お二方とも(一社)全国手をつなぐ育成会連合会(全育連)役員)が助言者として参加し、運営をサポートしました。

最初に、言語以外のコミュニケーション手段により誕生の月日順に並ぶ、という恒例のアイスブレイクでグループメンバーの関係づくりから始まり、初日は、①基調講演等を見て感じたこと、共生社会とは何か等の個人ワークと模造紙とポストイットを使用してのグループ共有、その状況についての発表がグループごとに行われました。



初日のおわりには、翌日のセッションに向けて、相模原障害者殺傷事件を振り返り、様々な意見や価値観と向き合う時間を持ちました。研修テキストには、事件直後に発せられた全育連の声明文とそれに対する手紙やメールの内容や、事件を丹念に追って報道した神奈川新聞の記者懇談会記録を掲載していますが、助言者の久保さんから受講者に向けて、事件直後に報道された犯人の「障害者は生きていく価値がない」という言葉に対して、重度の障害がある息子さんを持つ一人の親として久保さんが受けた衝撃や憤りについてのお話がありました。また、犯行に賛同する声がインターネット上でたくさんあったことや育成会の声明に対して犯人に共感する意見があったこと、最近においても施設内虐待の事案が起り、「まだ、私たちの子どもたちは、一人の人間として尊厳を認めてもらっていない」「怒りと言うよりも悲しい」というお話がありました。「なかなか分かり合えない家族の重苦しい気持ちがあるものの、それを乗り越えて皆さんと共生社会を実現していきたい。重度の障害者である前に名前の有る一人の人だということを社会に訴えていきたい」と宣言されました。「糸賀先生の言葉に「障害のある人に対する私たちの目がどう育っているのか」という趣旨の言葉がある。親自身にもあり、自分も含めて誰もが持つ差別的意識を認識したうえでどうしていくのか、一緒に考えていきたい。さらにモヤモヤするかも知れないが、私達自身がひょっとすると差別的な気持ちを持っているかもしれないと思っていただきながら、一緒に前に進んでいきたい」という熱いメッセージをいただき、初日の幕を閉じました。



二日目は、②やまゆり園事件をどう受け止めるのか、全育連の声明への反応に対して各自が思うところをグループで共有するセッション ③職場や地域で取り組む基本理念普及のアクションプランを各自が考え、グループでブラッシュアップするセッションが行われました。

【メンターの面々：皆さんブロック出身です】



社福)グロー 斎藤



社福)あーんど 熊谷



社福)ゆうゆう 小西



2日目の午前セッション終了後、開催委員会の皆様の写真撮影と、新任者・中堅職員のグループとが一緒になった写真撮影を行いました。受講者皆さんの清々しい笑みが、モヤモヤ感を抱きながらも、明日からの行動につながる手ごたえを感じていただいたことを表しています。



学生・新任者グループは、「障害とは?」「福祉とは?」というテーマでグループワーク。普段、何気なく使っている言葉を掘り下げるところから、この仕事の意味を見つめ直す時間となりました。玉木幸則さんからのレクチャーやライフストーリーの紹介を挟みながら、最後は「何をもって共生社会と呼ぶのか?」というテーマで対話しまそいた。ラストの感想共有では、「この研修に来て、本当に良かった」「何か具体的なアイデアはないけれど、明日からも前向きに現場で働きたい」という声が聞かれ、2日間のグループワークの幕を閉じました。



セッションの途中で全育連続括の田中さんから、「この研修の意義をもう一度確認したい。この研修を通して人は人との関係のなかで生きるということが大前提であり、奥田さんの話にあった「命を守る・命はぐくむ」ということは、人との関りがないと成り立たない。人によっては、その関りが難しい人、歪んでしまった人もいて、社会からはみ出してしまうということもあり、支援のなかで皆さんの役割が大変重要ということが確認できた。命そのものが大切であるということを中心に、それを貶める価値観であるとか脅かす存在に立ち向かえる力を備えてもらいたい。」「共生社会をめざすという意識をもって世の中を見直していただいたり、答えに窮する問いかけに自問自答してみたりするなかで、自分の“感情の源泉”という表現であったが、皆さんが持っている社会と向き合う価値観を確認していただいた。普遍的な価値を実践し言葉に残した糸賀一雄さんの語録を基本にしながら現代に価値ある実践に結び付けている奥田さんの話を聴き、そして日ごろ皆さんが大事にしている価値や感情を改めて振り返って皆と共有していただいた。研修のタイトルにあるように“福祉支援語り部”として研修で得たことを実践に活かしていただきたい。」という講評がありました。

語り部養成研修のグループワークが終了した後、久保さんから「二日間話し合っ、皆さんのモヤモヤが大きくなったかもしれないが、社会的弱者と言われる人たちや親も持つお互いのモヤモヤを理解しながら一緒に歩みを進めてほしい。乗り越えなければならない物事があれば、お互い理解しながら、一緒に“せーの”で乗り越え、皆さんと“手をつなぎ”あいながら、ともに進んでいける社会をめざしていきたい。地域で頑張ってください。」というエールがありました。フォーラムの閉会にあたって、地元開催委員会委員長で（社福）慧誠会 帯広生活支援センター所長の三上さんから閉会の挨拶があり、全てのプログラムが終了しました。



閉会后、二日間お世話になった開催委員会の皆さんと。

今年度のフォーラムがコロナ禍のなかで、日程が遅れながらも10月のとち帯広でスタートし、成功裏に終えることができたのも、これまで熱心にプログラムを考え、実施を支えていただいた新・旧実行委員会委員やワーキンググループの皆さんや講師や受講者のみなさんとともに、何よりも絶大なご支援ご尽力をいただいた地元協力法人や開催ブロックのメンバーの皆さんのおかげです。

とりわけ事務局を務めていただいた（特非）十勝障がい者支援センターはじめ、2日間とも研修会場でお世話いただいた開催委員会の皆様の献身的な働きと心配りに対しまして、言葉では言い尽くせませんが、心から感謝を申し上げ、報告いたします。ありがとうございました。